

学校教育目標

自律 共感 協働

子どもたちがめざすこと

【自律】自分で決めて行動する 【共感】相手の立場に立って考える 【協働】みんなで目的を達成する

指導方針

- ・学校・家庭・地域で情報及びビジョンを共有し、学校運営に参画する。
- ・子どもたち一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導と必要な支援を行う。
- ・経営方針のもと、教員一人一人の活動を組織的に機能させる。

【「確かな学力」の育成】

- (1) 主体的・対話的で深い学びの充実
- (2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着
- (3) 読書活動の推進
- (4) 吉見小スタートアップカリキュラムの実施



【多様性と包括性のある教育の推進】

- (1) 一人一人の違いや多様性を認め合える学級経営
- (2) 特別な支援や支援を必要とする児童への対応力の向上
- (3) 教育相談体制の充実
- (4) 誰一人とり残されない学びの保障
- (5) 各ステークホルダーからの意見聴取・対話

【社会的自立に必要な資質・能力・態度の育成】

- (1) 健やかな体の育成
- (2) 運動を通じた豊かな心身の育成
- (3) 人権教育の推進
- (4) 道徳教育の推進
- (5) グローバル化に対応する力の育成
- (6) 情報活用能力（情報モラル教育を含む）の育成
- (7) 主体的に社会の育成に参画する態度の育成（ふるさと学）
- (8) 防災教育の推進
- (9) SDGsの推進



【いじめ等問題行動への対応】

未然防止・早期発見・早期対応における組織対応の徹底

【家庭との連記促進】

- (1) 子どもの望ましい生活・学習習慣づくりの推進
- (2) 家庭教育に関する必要な情報の発信
- (3) 子どもの社会参加に向けた家庭との連携の促進

めざすコミュニティ・スクール

主体性を持つ学校運営協議会の主導により、吉見、鴨庄の地域・学校・家庭がそれぞれ本来の役割を発揮し、地域の教育力を活かした学校支援を行う。また、持続可能なコミュニティ形成をめざす。

本校の特色ある取組

- (1) 統合加配教員を活かしたきめ細かな指導
- (2) 吉見・鴨庄のフィールドで展開する「ふるさと学」
- (3) 5・6年生「金管バンド」
- (4) 4年生「和太鼓」
- (5) こども園との連携



目標 自分で決めて行動する子に(自律)

「自分で決める」自律型の子どもを育てることが、最高位の目標です。

その力は、主に授業の中で培い、学校生活全般で展開します。子どもたちがワクワクして登校しているかを指標に、児童、教職員、家庭、地域それぞれが、当事者意識を持って学校経営に参画していきます。



※ 「Volatility:変動性」「Uncertainty:不確実性」「Complexity:複雑性」「Ambiguity:曖昧性」の4つの単語の頭文字をとった造語

「確かな学力」の育成

*指標「勉強は好き」と思う児童の割合の増加

(1) 主体的・対話的で深い学びの充実

- ・主体的・対話的な授業を展開する → 「しんかタイム」
- ・言語活動をレベルアップさせる → 「思考の技」
- ・授業改善を図る → 「ふらっと週間」=互いの授業参観
- ・課題解決型学習 → 「プロジェクト型」の探求プロセス

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着

- ・複数人で学力の把握を行う → 「チームミーティング」
- ・基本的な知識・技能の定着 → 「スキルタイム」
- ・個別最適な学びとつまずきの解消 → 「eライブラリー (デジタルドリル)」
*指標：児童生徒一人一人の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面での ICT 機器の活用頻度の増加
- ・理数教育の充実 → 「計算検定」
- ・外部人材の活用 → 「ひょうごがんばりタイム」
- ・グローバル化への対応 → 「外国語教育」の充実
- ・家庭学習の適切な設定 → 「自己調整能力」を育成
→ 「自主課題」は4学年3学期以降を目途に移行

(3) 読書活動の推進

- 「読み聞かせ」「一斉読書」
- 「すきま読書」のための公立図書館お届け図書
- 「読書マイスター」の活用

(4) 吉見小スタートアップカリキュラムの実施と改良

しんかタイム：個人思考から全体思考にうつるまでの時間を「しんかタイム」とし、個人思考で考えを持つことができた者から離席し、考えを持つことができた者同士が意見交流し、自分の考えをアウトプットし合う。決められた時間にできるだけのアウトプットを行うので、自分の考えに自信を持つこと（信化）ができる。また友達との意見交流によって、自分の考えをより良いものにする（深化）こともできる。実施を重ねると、どの教科においても自分から「しんかタイム」をしたいと進んで行動する（進化）ことができるようになる。教師は、「しんかタイム」の実行者に対して、称賛など評価言を与えることで、考えを持つことやそれを人に伝えることの大切さや喜びに気づく（真価）ことができる。また、離席していない者（思考中、もしくは、コミュニケーションに自信がない）に寄り添い、課題に応じた声掛けを行うことで、協働的な学びの中で、個に応じた指導を行う。

社会的自立に必要な資質・能力・態度の育成

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための基盤を養う。

(1) 健やかな体の育成

- ・児童自ら体調管理ができる能力を育てる。
 - ・望ましい食習慣を身に付けさせる→学校給食
 - ・子どもの望ましい生活習慣・学習習慣づくりの推進
- *指標：毎日同じくらいの時刻に寝ている児童の増加

(2) 運動を通じた豊かな心身の育成

- ・体育の授業の充実
- *指標：日常から外遊びに親しむ児童の増加

(3) 人権教育の推進

- ・人権課題の解決に向け総合的に取り組む。
- ・金管バンド活動の軸に「人権」を据える。

(4) 道徳教育の推進

- ・他者や自己との「対話」により生き方についての考え方を深めさせる。
- ・教員は、ローテーションで授業を実施する。

(5) グローバル化に対応する力の育成

- ・英語によるコミュニケーション能力の育成。
- ・日本や郷土の伝統と文化を理解する。

(6) 情報活用能力 (情報モラル教育を含む) の育成

- ・一人一台端末の活用
- ・教育DXの推進。

(7) 主体的に社会の形成に参画する態度の育成 (ふるさと学の推進)

- ・人々とのふれあいを通して、ふるさとへのよさを知り、課題について理解を深め、地域の一員としての自覚を持たせる。
 - ・地域の教育力を活用する。地域学校協働活動推進員設置
- *指標：地域や社会をよりよくするために何かしてみたいと思う児童の割合の増加

(8) 防災教育の推進

- ・災害に適切に対応する能力の基礎を培う

(9) SDGsの推進

- ・環境に関心をもち、自然に対する感性を養う。



多様性と包括性のある教育の推進

(1) 一人一人の違いや多様性を認め合える学級経営

- ・多様な児童が在籍することを前提とした教育のユニバーサルデザイン化。
- *指標：学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると答える児童生徒の割合の増加

指導者に高い受容力があることが、多様性の教育に関わる最初の条件である。児童が無意識的な教員の言動から吸収する事柄は、教えるよりも影響を与える「隠れたカリキュラム」となる。



ダイバーシティとは直訳すれば「多様性」ということで「幅広く性質の異なる者が存在する」という意味である。様々な違い (差異) が存在するダイバーシティは、第1属性 (内側の輪) と第2属性 (外側の輪) の2つのタイプからなっている。第1属性には、年齢、性別、国籍、人種、障がい、LGBTなどの性的マイノリティが挙げられる。第2属性には雇用形態や、婚姻、嗜好、収入、出身地、学歴、趣味や価値観といった他者との「違い」がありその数は無限である。

(2) 特別な支援や支援を必要とする児童への対応力の向上

- ・個別の支援計画の共有
- ・特別支援教育委員会の定期開催

(3) 教育相談体制の充実

- ・昨年度実績：スクールカウンセラー（市島中拠点校）教育支援センター／氷上特別支援学校

(4) 誰一人とり残されない学びの保障

- ・校内サポートルームを整え、学びたいと思った時に学べる環境を備える。（含む ICT 活用）
- ・心の小さな SOS を見逃さず、「チーム学校」で支援する
- ・児童、保護者との教育相談を充実させ、ケースに応じて校内サポート体制を整える。

不登校になると全部のつながりから離れることになってしまう。この構図を変えていく。
不登校児童生徒支援員の活用

*指標：学校内外で専門機関等の相談・指導等を受けていない不登校児童数の割合の減少

(5) 各ステークホルダー（子供を含む）からの意見聴取・対話

いじめ等問題行動への対応

*指標：自分にはよいところがあると思う児童生徒の割合の増加

*指標：普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある児童生徒の割合の増加

*指標：友達関係に満足している児童生徒の割合の増加

(1) 生徒指導において、以下の点に留意する。

- ①変化への感度を高く持つ
- ②報連相を迅速に
- ③事実関係の正確な把握
- ④特別支援教育の視点を持つ
- ⑤家庭への迅速な報告
- ⑥解消後の事後ケア

生徒指導の考え方

- ・良し悪しに関わらず、教室の様子や児童の実態を話題にする習慣を持つ。
- ・喧嘩やトラブルは、ゼロにすることが目標ではない。適確に対応し自浄能力（組織内の悪弊を自分たちで改めることのできる力）を育んでいく。
- ・児童には納得して帰宅
- ・保護者には、学校で起こったことの一部始終を伝えることを基本とする。

(2) いじめの対応について、以下の点に留意する。

- ・いじめを積極的に認知する。認知したケースにはいじめ対応チームで組織的に当たる。
- ・いじめアンケートによる年3回の、全児童への個人面談を確実に実施する。
- ・未然防止、早期発見・早期対応における組織対応を徹底する。
- ・児童や家庭等からの情報提供に迅速かつ丁寧に対応する。

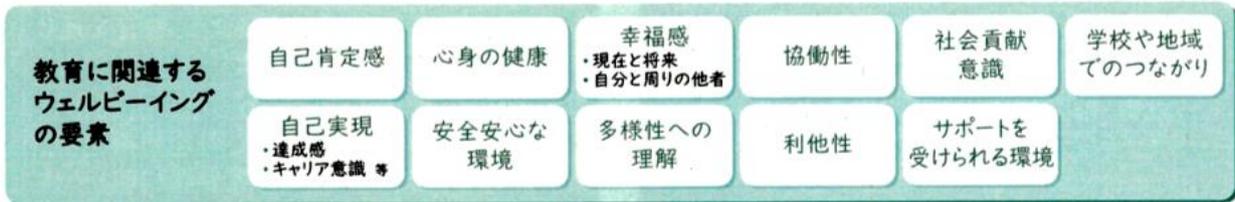
家庭との連携促進

- (1) 子どもの望ましい生活・学習習慣づくりの推進
- (2) 家庭教育に関する必要な情報の発信
- (3) 子どもの社会参加に向けた家庭との連携の促進

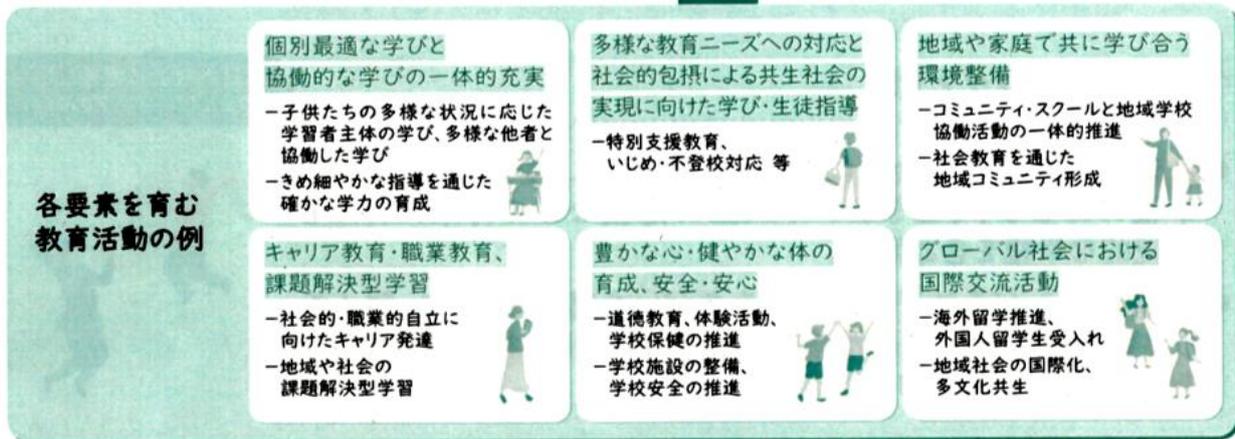
教育とウェルビーイング

日本社会に根差した
ウェルビーイングの向上

- 不登校やいじめ、貧困など、コロナ禍や社会構造の変化を背景として子供たちの抱える困難が多様化・複雑化する中で、一人一人のウェルビーイングの確保が必要
- 子供・若者に、つながりや達成などからもたらされる自己肯定感を基盤として、主体性や創造力を育み、持続可能な社会の創り手の育成を図る必要
- 地域における学びを通じて人々のつながりやかかわりを作り出し、共感的・協調的な関係性に基づく地域コミュニティの基盤を形成



教育活動全体を通じたウェルビーイングの向上

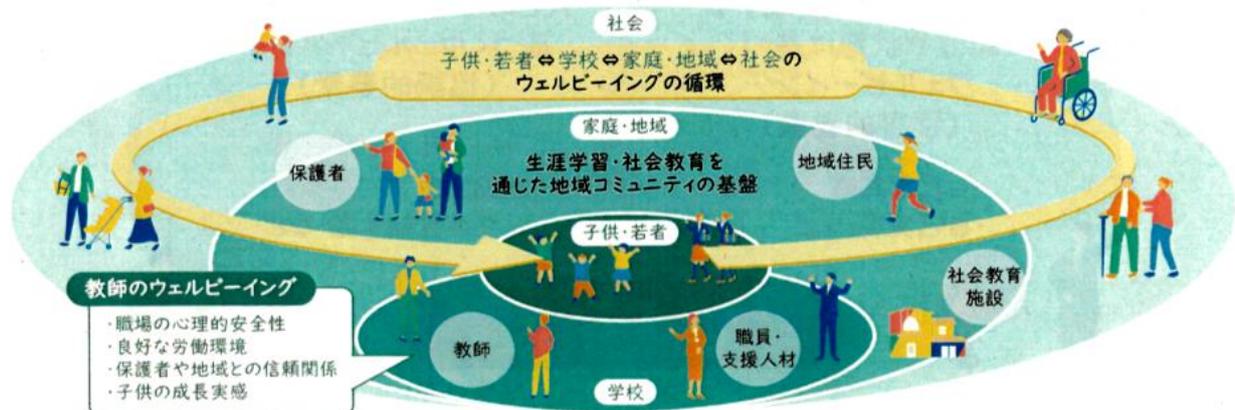


主観的認識のエビデンス把握

教師のウェルビーイング、 学校・地域・社会のウェルビーイング

日本社会に根差した
ウェルビーイングの向上

子供たちのウェルビーイングを高めるためには教師をはじめとする学校全体のウェルビーイングが重要。また、子供たち一人一人のウェルビーイングが、家庭や地域、社会に広がっていき、その広がりが多様な個人を支え、将来にわたって世代を超えて循環していくという姿の実現が求められます。



ウェルビーイング解説動画はこちらからチェック!

